

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Long-Term Outcomes after Stoma Creation in Crohn's Disease:

A Retrospective Cohort Study of 422 Patients

(クロウン病に対するストーマ造設術後の長期経過に関する検討:

422 例の後ろ向きコホート研究)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 器官・代謝制御系

炎症性腸疾患学(指導教授 池内 浩基)

氏 名 長野 健太郎

背景・目的: クロウン病 (Crohn's disease: CD) は慢性炎症性腸疾患であり, 腸管の狭窄や瘻孔, 膿瘍などに加え, しばしば直腸肛門病変を合併する. CD では, 直腸肛門病変の悪化や腸管状態不良, 縫合不全など様々な理由によりストーマ造設を要する症例が存在する. ストーマ造設後に閉鎖可能となる症例がある一方, 長期間閉鎖できない症例や永久ストーマへ移行する症例もみられるが, その長期経過については十分に検討されていない. 本研究では, CD 患者におけるストーマ造設の要因と造設後の経過を検討し, 永久ストーマの造設率および長期転帰を明らかにすることを目的とした.

方法: 1974 年から 2017 年までに当院で手術を施行した CD 患者 1,440 例のうち, ストーマ造設を要した成人 422 例を対象として後方視的に検討した. 永久ストーマは, 直腸切断術により造設されたストーマ, または直腸切断術以外で造設され 24 か月以上閉鎖されなかったストーマと定義した. Kaplan-Meier 法を用いて永久ストーマ非造設率を算出し, 生物学的製剤が広く使用されるようになった 2005 年を基準として, その前後で比較した.

結果: 422 例のうち, 初回ストーマ造設時に 107 例 (25%) が永久ストーマ, 315 例 (75%) が一時的ストーマであった. 一時的ストーマ 315 例のうち 98 例 (31%) でストーマ閉鎖が行われたが, 133 例 (42%) は未閉鎖のまま経過し, 84 例 (27%) はその後直腸切断術を施行された. また, ストーマ閉鎖後も 13 例 (13%) で再造設を要した. 一時的ストーマの造設理由は, 直腸肛門病変の悪化が 224 例 (71.1%) と最も多く, 腸管状態不良 75 例 (23.8%), 縫合不全 14 例 (4.4%) であった. 特に直腸肛門病変の悪化を理由にストーマを造設した 224 例では, 最終的に再造設なくストーマ閉鎖を維持できた症例は 29 例 (13%) にとどまり, 87%が永久ストーマとなった. 永久ストーマ非造設率は 10 年 94.8%, 20 年 82.7%であり, 2005 年以降ではそれぞれ 95.9%, 86.5%と, 2005 年以前と比較して有意に高かった ($P=0.032$).

結論: CD における一時的ストーマ造設の主因は直腸肛門病変の悪化であり, これを理由にストーマを造設した症例では, 多くが長期的に永久ストーマへ移行していた. 永久ストーマを回避するためには, 直腸肛門病変を含めた十分な病勢コントロールと継続的なサ-